

「知」の集結が、 新たな価値、地域 そして時代を創造する

思想あってこそその経済

企業や産業というものは、新製品・新技術・販売戦略、あるいはこれらを取り巻く要素や情報を積極的に統合し、できるだけ早く周囲の社会に働きかけようとしています。その実現のために、これらは一定の地域に集まろうとします。またこうした人間の組織は、その時代や活動範囲によっても影響されます。

でも、人間が組織に「集まろう」と参加すること自体に、さらにいえば、「集まる」ためにコミュニケーションの中に、「割に合う」という「合理的な期待」があって、はじめてさまざまな集団に加わる動きが始まります。

西岡 幹雄

Mikio Nishioka

【研究テーマ】

日英米の比較経済思想、
日本の経済社会における
国際化と地域の再編成

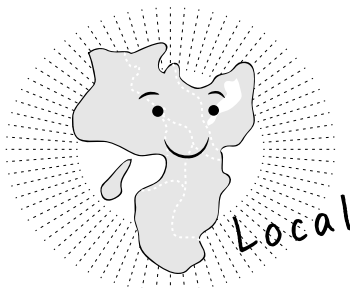


専門的な言葉で言いますと、人・サービス・資金に関する情報のリスクを避けるために、地域的な仕組みや取引上のコストが社会を媒介しています。さらにいえば、これまでの日本を特徴づけてきた、国際化と地域の再編成もまた、こうした取引上の「合理的な」円滑さを媒介にした、共通の認識、文化の確認や一連の行為に対するモラルの信頼性が、明らかになることで進展します。

持続的に発展できる地域と社会を考えていく上で、信頼の構造、社会メンバー間の協調と役割、そして何よりもこうした信頼と制度を可能にする基盤が、どのようなものであるかを具体的に考えないと、現実の経済・経営も展開しません。

世界と地域の状況に関心を向けよう

「世界の大義」にもとづいて「富国」（経済発展）と「厚生」とを実現するために、産業構造と輸出主導に命運をかけた日本の国際化は、これまでの仕組み、取引上のコ





スト、信頼と制度に対して、「合理的な」円滑さを要請する地域の再編成でした。また“創造的な産業と快適な空間をもつ都市”でなければ、国際産業競争力の維持と厚生の上向とを両立させることはむずかしいと決断した関西近代都市の決断も、“国際産業上の優位と創造地域”に向けての信頼と制度が確保できる基盤にかかっていました。

さまざまな価値、地域そして時代に対して、今日、将来、どのような社会的基盤の上に立って「コミュニケーションするのか」「翻訳するのか」、そんなことを考えるのが経済と比較思想の役割です。

経済学研究と、 ゼミ生による研究プロジェクトを結合した、 新たな価値、地域そして時代の創造に向けて

授業や研究では、21世紀に至るまでの安定と不安定に悩まされ続けた人間と思想、コミュニケーションと知識創造の舞台がなぜ大都市でなければならないのかなどを扱っています。またこのような知識とその活用がなければ、人々は都市の中にアメニティ（憩いと働き）の価値を見出せなくなってしまう。

こうした「新たな価値、地域そして時代の創造」を共通の認識にして、私たちの経済学研究とゼミの研究プロジェクトはスタートしております。

具体的には、(2013年度)「大阪・関西発の地域成長戦略とアベノミクスとの親和性に関する提言」、(2014年度)「特区プロジェクトの可能性と関西発の6次産業化への挑

戦～規制緩和によって日本の農業は6次産業として成長できるのか：兵庫県・養父」（地域とのジョイントとしてEve祭にゼミ参加）、「近現代関西産業 Map—関西経済の近代化遺産と現代経済社会に対する課題地図—」、そして2015年は「関西経済の活性化のための比較分析」および「関西の企業家群像と新たな産業構築の可能性」にチャレンジしています。

2016年以降もまた、経済学研究とゼミ生による研究プロジェクトとは、京都・関西発の「新たな価値、地域そして時代の創造に向けて」飛躍し、世界にそれを発信しようと思っています。

